

# 生態学的思考とは何か

小野山敬一 (ONOHAMA Keiichi)

地球村自遊学者 (a philosophic scientist of our village Earth)

「ecology」は1866年にHeackelによって造語され、生態学は当初、生理学の一部門とみなされ、独立の分野として認められたのは1890年代である。近年では、「公害や環境問題などとの関わり（への期待）を通じて、広く一般社会でも認められた。では、生態学には独自の発想や問題解決方法があるのだろうか。その思考形式、方法論、使用する概念などに、どのような特徴があり、固有の問題があるのかを、システムのアプローチから検討および探求した結果を即興講演する。鍵言葉（鍵語や鍵句）の候補者は次の通りである。

生物体，個体群，群集（共同体），種，タクソン，システム，『系統』。

属員関係，包含関係，部分 - 全体関係，クラス - 実例関係，レベル関係，システム間関係，測定における尺度の関係。

同定，同一性，「連続性」，比較の方法，システム分析，シミュレーションと予測。

分類的思考，タクソン学的思考，全体論，システムのアプローチ。

叙述的説明，歴史的説明，タクソン学的説明，生態学的説明，メカニズム，制御。

ニッチ，空きニッチ，職業，隙間産業，食物関係，空間占有関係。

至近要因（近接要因）と究極要因。物物間相互作用。ニッチ空間，生活空間。

1. 生態学とは、それが扱う対象として定義すれば、生活の（科）学である。（定義としてよく挙げられる、生物と環境との関係を扱う学というのは、生態学を特定する条件にはならない。）

2. 生態学的思考として特徴的なものに、ニッチがある。

3. ニッチ概念を、タクソンとの関係で分類すれば、タクソンにもとづいたニッチ（タクソン準拠的ニッチ taxon-based niche）と、タクソンにもとづかないニッチ（タクソン非準拠的ニッチ non taxon-based niche）に二分できる。

4. タクソン準拠的ニッチにおいては、『空きニッチ』は存在し得ない。タクソン非準拠的ニッチによって概念構成すれば、『空きニッチ』は存在し得る。

5. タクソン非準拠的ニッチにもとづけば、進化プロセスでの新奇生成物（たとえば、新種に属する生物体）の可能性を想定するための空間を構成できて、そしてそれによって新奇生成物を予測できるであろう（射程 scope の拡大）。

（5b. ニッチ空間について、進化やニッチ産業を例として検討する。）

6. 生態学的思考として特徴的なものに、全体論がある。（むろん、群集個別観に見られるように、個体主義という対立的立場も強固である。そこで、中庸の道としてのシステムのアプローチがあるが、ここでは置き去りにしておく（最後に復活させるという筋書きです）。）

7. 全体論の標語的命題は、『あらゆるものは、他のあらゆるものに繋がっている

Everything is connected to everything else』(全体論的連繋性テーゼと呼ぼう)である。

7. Mahner & Bunge (1997: 25) のシステム主義では、『あらゆる物は、他の或る物または物たちと団結する Every thing hangs together with some other thing or things』(穩健的連繋性テーゼと呼ぼう)である。

8. 存在論的には、全体論的連繋性テーゼを採用し、しかし、人間は有限の存在者であるがゆえに、認識論的には、穩健的連繋性テーゼを採用しても、矛盾しない(こんなもんで、どうでしょう?)。

9. 結局のところ、世界はもっぱら物から構成される、という(科学的営為にとって健全な効用を持つと思われる)唯物論的テーゼにしたがえば、実在する世界、つまり物質的『現実』世界、に存在するのは、物だけが存在し、物についての概念と物物間相互作用という概念によって、われわれは世界を理解・説明・予測・制御するのであるから、すべての核心は物物間相互作用とは何かである。(言うまでもなく、ここでは、物とは何かということを棚上げしている。)

10. したがって、物物間をつなぐ結合ないしはつながりの関係の分類(種類と程度)によって、生態学的関係もまた、分類されるべきである。

11. 生態学的世界は、もっぱら生物体から構成される、という前提を設定すれば、議論が、あるいは理論構成に便利である。(サブクオーク類の生態についてという、物理学かつ生態学的論文は可能である。慣習によって、物理学に関連する学術雑誌に掲載されているにすぎない。物活論を採用すれば、物理学帝国の領土が拡大するほど、生物学帝国の領土も拡大する。この逆は、真であるか、真でないかの、どちらかである。)

12. 物物間相互作用を要素または単位として理論構成することは可能である。(例として、群集についての『関係の総体』「論」が挙げられる。)

[紙空間はまだ埋め尽くしていないが.....]

(このへんで、後は、講演でのお楽しみに!.....)

## ・文献

- Blitz, D. 1992. Emergent Evolution: Qualitative Novelty and the Levels of Reality. ix+239pp. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Bunge, M. 2003. Philosophical Dictionary. Enlarged edition. 315pp. Prometheus Books, Amherst, New York.
- Ford, E. D. 2000. Scientific Method for Ecological Research. xix+564pp. Cambridge University Press, Cambridge.
- Mahner, M. and Bunge, M. 1997. Foundations of Biophilosophy. xviii+423pp. Springer - Verlag, Berlin.
- McIntosh, R. P. 1985 (paper 1986). The Background of Ecology: Concept and Theory. xiii+383pp. Cambridge University Press, Cambridge.
- Simons, P. 1987. Parts: A Study in Ontology. xiii+390pp.